

20011

OFDIにて観察しえた2腔構造を呈するSES再狭窄症例

【症例】64歳男性。2006年に狭心症にてPCIを施行され、seg7の90%病変に対しCypher STENT(3.5×18mm)を留置、拡張良好にて手技終了。その後、胸部症状無く経過し2008年のMDCTではSTENT再狭窄及び新規病変等は認められなかった。2014年3月、MDCTにてseg7のSTENT内再狭窄及びseg6に75%の狭窄を認め、翌月の4月にカテーテル検査を施行した。CAGはMDCT所見とほぼ一致しており、seg7のSTENT内の一部に解離様の像を認めた。引き続き病変部位に対してPCIを施行。まず、OFDIにて病変を観察。STENT内狭窄部位は2腔構造を呈しており、薄い被膜によって隔てられていた。病変部位のMLD・MLA・最小STENT径・STENT面積はそれぞれ、1.28mm・1.40mm²・3.32mm・9.70mm²であり被膜の最薄部は50μmであった。病変部位に対してPOBAした後、再びOFDIを施行。STENT内にはPOBAによってできたと思われる被膜断裂が生じていた。同部位に対しNobori(3.5×24mm)を留置。若干の拡張不良を認めたため後拡張を行い手技終了とした。【考察】症例は、SES留置後約7年5カ月経過したSTENT再狭窄症例である。OFDIにて確認された空洞箇所はDES留置後の炎症反応などにより脆弱プラークが形成され、その内容物が緩やかに流出し空洞構造を呈したと考えられた。【結語】当院では2013.11月よりOFDIの使用を開始しIVUSでは解析困難な病変部位の状態がより鮮明に観察できることからその使用頻度も多くなっている。今回、OFDIの特性が生かされた症例を経験したので報告する。